

明暗評釈 三

第二章（上）

鳥井正晴

初出

大正五年（一九一六年）五月二十七日・「東京朝日新聞」。

大正五年（一九一六年）五月二十六日・「大阪朝日新聞」。

評釈

①「鎖を切つて逃げる事が出来ない時に犬の出すやうな自分の唸り声が判然聴えた。」

第七十二章に、△御者は先刻から時間の遅くなるのを恐れる如く、止せば可いと思ふのに、濫りなる鞭を鳴らして、しきりに瘦馬の尻を打つた。失はれた女の影を追ふ彼の心、其心を無遠慮に翻訳すれば、取りも直さず、此瘦馬ではないか。では、彼の眼前に鼻から息を吹いてゐる憐れな動物が、彼自身で、それに手荒な鞭を加へるものは誰なのだらう。▽と、ある。

②【突然】

（一）、①、第三百三十九章に、△「突然。関さんへ行つちまつたのね」 「えゝゝ、突然。本当を云ふと、突然なんでものは疾の昔に通り越してゐましたね。あつと云つて後を向いたら、もう結婚してゐたんです」▽と、ある。

②、第三百八十三章に、△突如として彼女が関と結婚したのは、身を翻がへす燕のやうに早かつたかも知れないが、

それはそれ、是は是であつた。√と、ある。

清子の離叛は、津田にとって、全き「突然」な行為であつた。

(二)、①、第七十二章に、△一方には空を凌ぐほどの高い樹が聳えてゐた。星月夜の光に映る物凄しい影から判断すると古松らしい其木と、突然。一方に聞こえ出した奔湍の音とが、久しく都会の中を出なかつた津田の心に不時の一転化を与へた。彼は忘れた記憶を思ひ出した時のやうな気分になつた。「あゝ世の中には、斯んなものが存在してゐたのだつけ、何うして今迄それを忘れてゐたのだらう」不幸にして此述懐は孤立の儘消滅する事を許されなかつた。津田の頭にはすぐ是から会ひに行く清子の姿が描き出された。√と、ある。

②、第七十五章に、△彼はすぐ水から視線を外した。すると同じ視線が突然。人の姿に行き当つたので、彼ははつとして、眼を据ゑた。然しそれは洗面所の横に懸けられた大きな鏡に映る自分の影像に過ぎなかつた。(中略)是が自分だと認定する前に、是は自分の幽霊だといふ氣が先づ彼の心を襲つた。√と、ある。

③、第七十六章に、△ひっそりした中に、突然。此音を聞いた津田は、始めて階上にも客のゐる事を悟つた。(中略) 其時彼の心を卒然として襲つて来たものがあつた。「是は女だ。然し下女ではない。ことによると……」

不意に斯う感付いた彼の前に、若しやと思つた其本人が容赦なく現はれた時、今しがた受けたより何十倍か強烈な驚ろきに囚はれた津田の足は忽ち立ち竦んだ。√と、ある。

④、第七十七章に、△彼には不意の裡に予期があり、彼女には突然。の中にたゞ突然。がある丈であつたからとも云へた。√と、ある。

小説の後半部、津田は、清子に会うため旅に出る。

旅に出る第七十七章を境として、第一部(一章〜百六十七章)と、第二部(百六十七章〜百八十八章)に分ける

とすると、小説の第二部において、「突然」という語は、再び重い指標を担って頻出する。

「突然」について、後藤明生、清水孝純、高木文雄に、問題提起がある。以下、三氏の見解を、並列する。

(三) 後藤明生の、△「都市小説」——あるいはフィクションのフィクション▽（『文学が変わるとき』所収、筑摩書房、昭和六十二年（一九八七年）五月）に、次の見解がある。

△横光利一は「純粹小説論」（一九三五年）の中で、『罪と罰』における「偶然」の多発を指摘しているが、『罪と罰』に限らず、ドストエフスキーの小説には「偶然」と「突然」が氾濫している。実際、『罪と罰』には「突然」が「五百六十回」出て来ると勘定した研究家さえいる。その意味では横光の指摘は正しい。ただ、その「偶然性」を横光は、「感傷性」とともに「通俗小説の二大要素」と書いているが、わたしはドストエフスキーにおける「偶然」と「突然」は、通俗小説ではなくて、「都市小説」の要素だと考えている。

『罪と罰』は一八六六年（明治元年の二年前——鳥井注）に完成した。ロシアの農奴解放は一八六一年で、解放された農奴たちは下級労働者となって、どつとペテルブルグに流れ込んだ。『罪と罰』の舞台であるセンナヤ広場界限は、それらの流れ者、ヨソ者の吹きだまりで、ラスコーリニコフが殺害した金貸し老婆のアパートには、あらゆる種類の下級職人、料理女、売春婦、ドイツ人、下級官吏などが住んでいる。

『罪と罰』はさながら、ペテルブルグにおけるそれら「根なし草族」のカタログともいえるが、彼らはお互いに「過去」を知らない「他者」同士であり、ロシアじゅうからペテルブルグに漂着した「偶然」の隣人に過ぎない。都市とは、そもそもそのような「偶然の隣人」による共同体であって、ドストエフスキー作品における「偶然」や「突然」が、都市小説の要素であるというのは、そういう意味である。（P. 24）△

（四）、清水孝純の、△『明暗』キー・ワード考——〈突然〉をめぐる——▽（『漱石その反オイディプス的世界』所収、翰林書房、平成五年（一九九三年）一〇月）に、次の見解がある。

△いうまでもなく、〈突然〉という言葉は、日常生活において普通に使用される表現であって、それはその限りにおいて、われわれの予想を超えて出現した事態に向って発せられる驚きの表現にすぎない。しかし、この平凡な言葉が、特別な意味を負荷される場合がある。例えば、禅宗において、悟りは常に〈突然〉やってくるのであり、この場合、〈突然〉は深く神秘的な意味を帯びてくる。それは登りつめた論理の絶巔から、不可視の絶対への一刹那の挑躍であり、しかも、きわめて体験的なものというべきものだろう。この体験は、言語道断という点で、他人の体験と通約不可能であり、従って覚者の生と深くかわる。〈突然〉とは、まさしくそのような覚者にとっての、一回的な絶対性を秘めた表現なのだ。

『罪と罰』においても〈突然〉という表現が頻用されていることが、既に多くの研究者によって指摘されている。この場合にも、〈突然〉は、主人公ラスコーリニコフの存在と深く結びついた特殊な意味をもって現われている。いわば、主人公の内部での他者の出現、他者——すなわち身分的他者の出現のありようとかかわる。それは、つねに、〈突然〉あらわれてきて、主人公を予想外の行為へと衝き動かす。（P. 284）（中略）

「突発した」という言葉と、「どつと後から」以下の表現のそれぞれがあらわす〈突然性〉をひとしなみに扱うことは出来ないだろう。「突発した」は、肉体上の出来事とはいえ一応津田の心の外部の出来事の様態であり、後者の表現は、津田の心の内部の一件である。これは認識の〈突然性〉の表現である。肉体上の突発事件から、「此肉体はいつ何時どんな変に会はないとも限らない」といった感慨がひき出されることはわかる。しかし、そこから「精神界も同じ事だ」という類推に展開するのに、なぜ、「どつと後から突き落すやうな勢で」というような、〈突然性〉の表現が必要だったのか、恐らくこれは、先に述べた禅の悟得の場合と同じように、深く体験的なひとつの啓示だからである

う。だからこそ、「其変る所を己は見たのだ」という言葉が付け加えられたのだ。(P. 289) (中略)

〈突然〉が人間を瞬間的にパニックに陥し入れ、何らかの形で人間を歪め変容することが可能なのは、人間にこわばりがある場合だろう。こわばりはこだわりといいかえてもいいし、自己防衛の念、利己心、虚栄心、いろいろないい換えられようが、そうした既成の観念の世界に囚われている人間は、事態の突然の出現によって、瞬間的なパニックに陥入る。既成の観念へのこだわりは、彼をして事態に素直に順応させず、そこにおいて自我はゆがみ、ある場合には分裂する。理知は、新しい事態を、己れの裡に素直にとりこむことが出来ず、結局〈突然〉出現したものは、自我の亀裂に落ちこみ、謎として止まり、彼の心を長く圧する憑依となるだろう。運命の突然の襲来、身近なものの死の予想外の出来、それらが人間の魂にいかに憑依としての深い印刻を残すかについてはすでに先の『こゝろ』論で考察した所であった。(P. 326)〉

(五) 高木文雄の、△『明暗』の語り手▽(『漱石文学の支柱』所収、審美社、昭和四十六年(一九七一年)十二月)に、次の見解がある。

△『明暗』の中には「わざと」が全部で八十八回用いられている。此中には会話に用いられているものが三回含まれている。地の文に用いられているのは八十五回。似た「わざわざ」が四十七回の中会話二十回である。「殊更」と「故意」とはそれぞれ三回と一回という頻度の低さである。「わざと」が語り手の主観的判断に主として選ばれていると同時に、『明暗』の文体を特徴づける用語となつていふと言つてよからう。

この「わざと」の反対語と考えられる「突然」も八十七回用いられている。勿論「わざと」の反対語を「突然」だけに限定することは誤りであるが、我意に対する天意を想定してそれを人間の目から見ると「突然」という事になると考えられる。その見方で搜すと名詞としての「自然」という語や、「天」とか「因縁」とかいう語もあるのであつて、

超越的で不可知な意志を語り手が認めているらしい事が分る。——この超越的で不可知な意志の主体は、普段は人間をその意志の赴く儘に行為させているが、時に及ぶとダイモニオンのように人間に干渉してくる。——天と人との関係はそうように把握されていたものとみえる。だからこそ「事実」という語が九十五回を数えるまで用いられているのであろう。(P. 362) >

附記 一、『明暗』本文中。印は鳥井。

一、『明暗』本文の引用は、岩波書店刊『漱石全集』第七巻・明暗』（昭和四十一年六月二十三日第一刷発行）
昭和五十一年六月九日第二刷発行）
に拠った。但し、旧字は、新字に改めた。

一、『明暗』第一章の、「大阪朝日新聞」での初出は、大正五年五月二十五日である。

先に発表した、①、『明暗評釈・一』（『研究論集』第三十八巻、相愛女子短期大学、平成三年三月）、

②、『明暗評釈 二』（『相愛国文』第六号、相愛女子短期大学国文学研究室、平成五年三月）、ともに『明暗』・第一章の、「大阪朝日新聞」での初出を、大正五年五月二十六日と誤謬を犯した。ここに訂正しておきたい。

（平成5年12月24日）